

のように判断します。

- ・ア段の音につけば↓四段。「思はず」など
- ・イ段の音につけば↓上二段。「起きず」など
- ・エ段の音につけば↓下二段。「寄せず」など

【チェックテスト】

問 次の動詞の活用の種類を答えなさい。

- |      |     |      |     |
|------|-----|------|-----|
| 1 往ぬ | ( ) | 2 過つ | ( ) |
| 3 来  | ( ) | 4 蹴る | ( ) |
| 5 居る | ( ) | 6 老ゆ | ( ) |
| 7 をり | ( ) | 8 す  | ( ) |
| 9 出づ | ( ) |      |     |

(1) 四段活用

四段活用の動詞は、五十音図のア・イ・ウ・エの四段にわたって活用し、活用語尾の母音が「ア・イ・ウ・エ」と変化します。行によって子音は違いますが、母音は共通しますので、一つ覚えてしまえばどの行の動詞にも応用できます。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
言ふ	言	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
下に続く主な語		ず・む	たり・て	(言い切る)	時・こと	ども・ば	(命令で言い切る)

【チェックテスト解答】

- ナ行変格活用
- タ行四段活用
- カ行変格活用
- カ行下一段活用
- ワ行上一段活用
- ヤ行上二段活用
- ラ行変格活用
- サ行変格活用
- ダ行下二段活用

- 【未然】 1 (女は) いみじう心憂けれど、念じてものも言はず。(堤中納言物語・はい墨)
- 【連用】 2 いとうやうやく言ひたりしこそ、いみじく覚えしか。(徒然草・六七)
- 【終止】 3 それをすみだ河といふ。(伊勢物語・八)
- 【連体】 4 とかく世の中にいふことありければ、(大和物語・四三)
- 【已然】 5 したり顔に物なれて言へるかなと、(源氏物語・夕顔)
- 【命令】 6 「本言へ」と仰せらるるも、いとをかし。(枕草子・五月の御精進のほど)

学習のポイント

①活用語尾が「ア・イ・ウ・エ」となるのは、四段活用。

②四段の動詞は未然形の活用語尾がア段となる。

①活用語尾が「ア・イ・ウ・エ」となるのは、四段活用。

動詞の中で最も数が多いのが四段活用の語です。そのすべてを覚えることは不可能ですが、また不必要ですが、活用の見分け方はしっかりと覚えておきましょう。

動詞の活用の種類を問われた際には、「〇行〇活用」のように、活用の行を含めて答えることが大切です。例えば、現代語の「言う」は、古文では「言ふ」と書きます。表記上八行の「ふ」という音を用いるので、この動詞は「八行四段活用」と答えます。つまり、「言はず」「言ひたり」「言ふ」「言ふトキ」「言ヘドモ」「言へ」というように、「八行の音で母音を四段にわたって活用する」動詞ということなのです。

②四段の動詞は未然形の活用語尾がア段となる。

四段活用の動詞は、未然形の活用語尾がア段の動詞です。ですから、未然形に接続する

- (女は) たいそうつらいが、我慢してももの言わない。
- たいそうに礼儀正しく言ったことが、素晴らしく思われた。
- (人々は)それをすみだ河と呼ぶ。
- 何かと世間でうわさをすることがあったので、
- 得意そうな顔に物慣れた様子で歌を詠んできたものだなあと、
- (これに) 上の句をつけなさい」とおっしゃるのも、とてもおもしろい。